

関連項目：教育活動プラン④

体験活動を推進して自己有用感を育む

目的

本校の児童は、友だちと協力し、集団でやり遂げることのすばらしさを実感する経験を十分には積んでいません。そこで、集団の一員としての連帯感や達成感を味わう体験活動を推進することにしました。

内容

● 自己決定の場づくりと共感的な人間関係の育成

本校では、5年生が毎年、「国立大洲青少年交流の家」（愛媛県大洲市）で1泊2日の集団宿泊学習（自然体験学習）を実施しています。青少年交流の家周辺の豊かな自然や文化に触れる体験を通して、学校における学習活動を充実発展させることが目的です。

また、校外における集団活動を通して、教師と児童、児童相互の人間的な触れ合いを深め、心に残る楽しい思い出をつくります。さらに、集団活動を通して、基本的な生活習慣や公衆道徳などについて体験を積み、互いを思いやり、共に協力し合ったりするなどの人間関係を築く態度を育てることをねらいとしています。

児童の宿泊学習での最初の関心事は、班編成です。5年生一人一人が編成の方法についての考えをもち、理由を添えて友だちの前で発表します。「機械的に決める」、「先生が決める」、「友だち同士で相談して決める」等々の意見が出されました。少数意見も尊重しながら、全員が納得するグループづくりができ、事前の計画や準備、練習が円滑に進みました。



【チームワークでゴールをめざそう】

● 自己有用感の育成

大洲の宿泊学習のメインは何といっても肱川でのカヌー体験です。殆どの児童が初の体験であり、香川県では見られない大きい川で、カヌーをうまく操作できたときの喜びはひとしおです。

「自分もやればできる」ことを強く実感できるときです。目標に向かって、自分が決めた役割を責任を持って果たし、友だちと協力することは、自分自身の自信となるだけでなくなかまの喜びにもつながっていくことを豊かな自然の中での体験を通して多くの児童が学びました。

青少年交流の家での集団宿泊学習を本校の特色ある教育活動の一つとしてとらえたときに、この体験活動は児童の心身を成長させ、自己有用感を育む教育活動として大きく貢献したことを確信しています。



【肱川での初のカヌー体験】

成果

こうした取組をすることで、どの児童も主体性を発揮しながら、自己有用感を高め、その後の学校における学習活動につなげていくことができました。自己有用感を育む体験活動の効果を上げるには、児童の意欲を尊重し、自主性や集団としての力を信頼することが重要であることを認識できました。